
仮面ライダー × 仮面ライダー ディライド&幽汽 MOVIE大戦PAST

仮面ライダー大好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×仮面ライダー ディライド&幽汽 MOVIE大戦PAST

【Nコード】

N3287Y

【作者名】

仮面ライダー大好き

【あらすじ】

【仮面ライダー幽汽 時の牢獄】

囚われた電王とゼロノスを救うべく幽汽とNEW電王の新たな戦いが始まる。

【仮面ライダーディライド 過去編】

蘇る過去、現れるかつての宿敵。今明かされるディライドの悲しき過去。

【MOVIE大戦PAST】

二つの物語が交差する時最大のMOVIE大戦が始まる！

仮面ライダー幽汽 時の牢獄“前編”（前書き）

時系列は最初のシーンはネオ電王の世界を去ってすぐ、そして現在という感じです。

仮面ライダー幽汽 時の牢獄“前編”

倉石ユウキ／仮面ライダー幽汽。

かつて近藤渚／仮面ライダーディライドと共に世界を巡っていた仮面ライダー。だがその正体は野上良太郎の世界で生と死をひっくり返そうとした死郎の子孫だった。

だが彼は渚と出会い、様々な世界を巡り真の仮面ライダーとなった。そして自身の世界を救うべく渚達と別れ、自分の世界へと帰還していった。

そしてこの物語は彼の新たな戦いの話である……………。

「ソラ、ただいま……………」

ユウキは今は亡き婚約者、神田ソラの墓前に立っていた。
ユウキは墓に花を供え、これまでの旅の事を話していた。

「つてな訳で色々あって、ここに帰って来たって訳だ」

一通り話し終わると一人の青年がユウキに近付く。

「ん？ユウキじゃないか。帰って来たのか？」

「シュウイチか……………」

北川シュウイチ／仮面ライダーゾルダ。

ユウキと共に戦っていた仮面ライダー。

「どうかしたのか？」

シュウイチはユウキが帰って来た事に疑問を抱く。

「さあな、俺にも良くわかんねえ。ただこの世界で何かが起きようとしてるって事は確かなんだ。何か変わった事は？」

「いや、何も……………」

ユウキとシュウイチがそんなやり取りをしていると、

——ドガアアアン——

「「！？」」

突如街の方で爆発が起きる。

「おいおいマジかよ！」

シュウイチはこの事態に驚きを隠せない。

「シュウイチ、行こう！」「あ、ああ！」

ユウキがそう言うつとシュウイチは戸惑いながらも現場へ急行する。

二人が現場に到着すると、ライノスイマジンとクラーケンイマジンが人々を襲っていた。

「シュウイチ、行くぞ!」「ああ、久し振りにな!」

二人はそう言うと言身準備を完了させる。

「変身!」「」

《スカルフォーム!》

ユウキは漆黒のボディを持ち、デンカメンにドクロが付いている仮面ライダー幽汽・スカルフォームに変身する。

一方シュウイチはミラーモンスターのマグナギガと契約した牛を模した緑のライダー、仮面ライダーゾルダに変身する。

幽汽SFはサヴェジガッシャーをソードモードに組み立て、ゾルダは銃型の召喚機・マグナバイザーを構え二体のイマジンに走り出す。幽汽SFはライノスを、ゾルダはクラーケンを相手に選び戦闘を開始する。

先ずはゾルダVSクラーケンの戦いだ。

ゾルダとクラーケンは互いに銃を使った遠距離戦を繰り広げる。

互いに一歩も退かない銃撃戦。

だがやはりゾルダの方が腕が上なのか少しずつ押し始める。

そして遂にゾルダの放った弾丸がクラーケンにヒットする。

「ぐあああ!」

ゾルダはその隙にカードデッキからアドベントカードを一枚取り出しマグナバイザーに装填する。

《シュートベント!》

するとゾルダの手に巨大な大砲・ギガランチャーが装備される。そして狙いを定めクラーケンにギガランチャーを放つ。

「喰らえ！」

放たれたギガランチャーは見事にクラーケンに直撃し、クラーケンは盛大に爆発した。

「ぐあああ！」

次は幽汽SFVSライノスの戦いだ。

二人は剣と棍棒による接近戦を繰り広げる。

だがライノスの体は硬く、中々攻撃が決まらない。

さらにライノスの重たい一撃が幽汽SFにダメージを与えていく。

「中々やるな、サイ野郎！だがどんな敵にも弱点は必ずある！」

幽汽SFはそう言うത്サヴェジガッシャー・ソードモードでライノスの比較的装甲の薄い箇所を的確に突いていく。
そしてある程度弱った所で、

「今なら行ける！」

そう言うてライダーパスを取り出しユウキベルトにセタッチする。

《フルチャージ！》

サヴェジガッシャー・ソードモードはオーラを纏う。そしてそれを振り下ろし地面に叩き付け衝撃波を放つ【ターミネイトフラッシュ・スカル】を放つ。

「はあああ！」

「があああ！」

【ターミネイトフラッシュ・スカル】を受けたライノスはダメージに耐えきれず爆発する。

幽汽SFとゾルダは変身を解く。

シュウイチはユウキにこう聞いた。

「本当みたいだな、この世界に新たな危機つてのは……………」

「ああ。でもやるしかない。俺達しか居ないんだから……………」

ユウキはそう言つと空を見上げる。

その空にはどす黒い雨雲が広がっていた……………。

【仮面ライダー幽汽 時の牢獄】

――二ヶ月後――

何処かの夜のオフィス街。二人の仮面の戦士が灰色の異形と戦っていた。

「なんだこいつ！めちゃくちゃ強いじゃねえか！」
『気を付けて、モモタロス！』

そう言った仮面の戦士の一人は、桃を模した仮面を持つ赤き戦士、仮面ライダー電王・ソードフォーム。

モモタロスというのは電王こと野上良太郎に協力するイマジンの一体である。

電王SFはデンガッシャー・ソードモードで灰色の異形を切り裂くが全く通じず灰色の異形の持つ巨大な鎌で切り裂かれる。

「ぐああああ！」

『モモタロス！』

するとそこへもう一人の仮面の戦士が灰色の異形と取っ組み合う。

「大丈夫か！？野上！」

『侑斗！』

そう言ったもう一人の仮面の戦士は牛を模した仮面を持つ緑の戦士、仮面ライダーゼロノス・アルティフォーム。

ゼロノスとは良太郎の姉である野上愛梨の婚約者、桜井侑斗の過去である青年期の桜井侑斗が変身する仮面ライダーだ。

灰色の異形はゼロノスAFを払い除け、鎌で切り裂く。

「うわあああ！」

ゼロノスAFは電王SFの所まで飛ばされる。

「大丈夫か！？」

「ああ……。だがこいつ、あの時より確実に強くなってやがる……………」

「！」

「ちい！あの時の様には行かねえってか！」

そう、今彼等が戦っているのはかつて倒した筈のイマジン、デスマジンだった。

電王SFとゼロノスAFは何とか立ち上がり再びデスに立ち向かうとした瞬間、

「はあ！」

今度は青い仮面の戦士がデスに斬りかかる。

『幸太郎！』

「じいちゃん、助けに来たぜ！」

この青い仮面の戦士は仮面ライダーNEW電王・ストライクフォーム。

そして彼の使う剣は相棒のイマジンであるデイが変身したマチェーデイである。

そして何故NEW電王SFが電王SFを祖父と呼んだのか。それはNEW電王に変身する青年、野上幸太郎は未来から来た良太郎の孫だからである。

電王SFとゼロノスAFはNEW電王SFがデスと戦っている隙に、

『モモタロス、みんな行くよ！』

電王SFはそう言うのと赤色の携帯電話、ケータロスを取り出す。そしてケータロスのボタンを四つ押し通話ボタンを押す。

《モモ！ウラ！キン！リュウ！》

そしてケータロスの側面に付いてあるボタンを押す。

《クライマックスフォーム!》

電王SFは良太郎に協力するイマジン、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス全てを憑依させ、ソードフォーム、ロッドフォーム、アックスフォーム、ガンフォームのデンカメンを全てを身に纏った強化形態、仮面ライダー電王・クライマックスフォームに変身する。

「じゃあ!行くぜ!」

電王CFはデンガッシャー・ソードモードを構えデスに向かって走り出す。

そしてゼロノスAFもゼロノスベルトからカードを抜き取り、

「デネブ、来い!」

そう言うとゼロノスAFの背後に侑斗に協力するイマジン、デネブが現れゼロノスAFはカードを緑の面から黄色の面に裏返し再びゼロノスベルトに装填する。

《ベガフォーム!》

ゼロノスAFはデネブを憑依させ、ドリルを模した仮面、胸にデネブの顔を出現させた仮面ライダーゼロノス・ベガフォームに変身する。

「最初に言っておく、胸の顔は飾りだ!」

『馬鹿っ!んなこと言っただけで行け!』

「わかった！」

ゼロノスVFのずれた発言に突っ込みを入れる侑斗。

突っ込まれたゼロノスVFはゼロガッシャーをサーベルモードに組み立て電王CFとNEW電王SFに加勢する。

だがデスは圧倒的な強さを見せ三人のライダーを幾度なく切り裂く。

「かなりやべえぞ！どうする！？」

モモタロスがそう言った瞬間上空からデンライナーが現れる。

「一旦退こう！」

NEW電王SFがそう言っているとデンライナーは電王CF達とデスの間を走り電王達を回収した。

ただし回収したのはNEW電王SFだけだが。

「幸太郎、あとは頼むぜ！」

「本気で行くぞ！」

モモタロス達はあとの事をNEW電王SFに任せデスに立ち向かった。

―デンライナー・食堂車―

「どういうことだよ！」

幸太郎はオーナーに激怒して、今にも殴りかかりそうな勢いでオーナーに突っ掛かる。

「幸太郎、落ち着くんだ」

それをテディが冷静なだめる。

コハナとナオミはそれを心配そうに見守る。

オーナーは怒る幸太郎に対し冷静にこう言う。

「今のままじゃ勝てません」

「だったら尚更じいちゃん達ほっとけないだろ！」

幸太郎はそう言うがオーナーは、

「良太郎君達は囿です。彼等もそれを理解しています」

オーナーの言葉に幸太郎は、

「囿って？」

「彼等がイマジンを止めている間に幸太郎にはある人物の下へ向かって下さい」「ある人物？誰だよ」

「行けばわかります」

オーナーがそう言うとデンライナーは速度を上げ走り出す。

―数日後―

「はああああ！」

幽汽SFとゾルダは今日も現れるイマジン達を倒していた。

「最近活発になり始めたな、イマジンの奴等」

「確かに。そろそろマジで気合い入れねえとな」

幽汽SFとゾルダはそんな事を言いながら変身を解く。その時だつた、上空から電車のレールが現れ、突如としてデンライナーが現れる。

「デンライナー？」

デンライナーは地上に降りユウキとシュウイチの前に停まる。

そこから一人の青年とイマジンが降りてくる。

青年とイマジンはユウキ達に近付く。

「何だ、あんた」

ユウキは青年とイマジンにそう聞く。

だが青年とイマジンは全く別の事を言う。

「あんたが死郎の子孫、倉石ユウキか？」

「何でそれを？ってかあんた誰だよ」

ユウキがそう聞くと、

「野上、幸太郎」

「相棒のテディだ」

その名前を聞いたユウキは暫く考え込むとハツとした表情をして、

「あ、先祖を倒した電王か！」

ユウキは手をポンと叩きながら言う。

「何だ、先祖の事わかるのか？」

「ああ、大体な」

ユウキがそう言うのと幸太郎は、

「なら話は早い。ユウキ、あんたに頼みがある」

「頼み？」

「ああ。じいちゃん達とゼロノスがイマジンに捕まった」

「なに！？」

ユウキはその事に驚きを隠せない。

「そんでじいちゃん達は今時の牢獄って所に捕まってる」

「時の牢獄？」

ユウキは聞き慣れない単語に首を傾げる。

「何でもそこにはあんたの協力無しには行けないみたいなんだ。だから俺達はある所の所に来たって訳」

「何で俺なんだ？」

ユウキがそう聞くと今度はテディが口を開く。

「ユウキ、幽霊列車は使えるか？」

「え？使えるけど……」 「時の牢獄に行くには幽霊列車が必要不可欠なんだ」「なるほど」

ユウキはそう言うのと暫く考え込む。
そして、

「でも、俺にはやる事が……」

ユウキは戸惑うがそこへシュウイチが口を開く。

「行ってこい、ユウキ。お前が帰ってくるまで、俺がこの世界を守る」

シュウイチがそう言うのとユウキは力強く頷き、

「幸太郎、テディ、行こう！時の牢獄へ！」

ユウキはそう言うのと幸太郎達と共にデンライナーへ乗り込む。
デンライナーはユウキ達を乗せると空に向かって走り出した。

―デンライナー・食堂車―

「はい、コーヒーどうぞ！」

椅子に座ったユウキにコーヒーを差し出したのはデンライナーの客室乗務員のナオミ。

ユウキはナオミのコーヒーを見て、

「なに、これ……………」

ユウキは一瞬戸惑うも、カップを手に取りコーヒーを飲もうとする。それを見たコハナは、

「あ、ちよつと！」

飲むのを止めようとするが時既に遅し。

ユウキはコーヒーを口に含む。

その瞬間、

「ぐえっ!？」

人間には恐ろしく不味いコーヒーを飲んだユウキはコーヒーを盛大に吹き出す。

「なんじゃこりゃ……………」

ユウキは顔を真っ青にして言う。

そして少し間を開けて静かにこう呟いた。

「信次郎さんのコーヒーが、懐かしい……………」

幸太郎はそんなユウキを見て苦笑いし、オーナーの下へ行く。

「それでオーナー、時の牢獄ってのはどこにあるんだ？」

幸太郎の問いにオーナーはチャーハンを食べながら、

「わかりません」

「は？」

オーナーの言葉にその場に居る全員が頭にはてなを浮かべる。

「ど、どういうことだよ？」

幸太郎は慌ててオーナーに問い詰める。

「時の牢獄とはいつどこに現れるかわかりません。ですからターミナルに行き、駅長に頼もうと思ひまして」

「な、なるほど……………」

幸太郎はとりあえず納得する。

そしてオーナーはチャーハンを口に運びながら、

「もうすぐ着く筈ですよ」

オーナーがそう言うとデンライナーの前に巨大なターミナル、キン
グライナーが現れる。

「あれがターミナルか……………」

ユウキは初めて見るターミナルを見て少しはがり感心していた。

ーターミナルー

デンライナーはターミナルに到着すると停車する。

ユウキ達はデンライナーを降りるとオーナーが、

「暫くターミナルで時間を潰していて下さい。駅長の所へ行ってくるので」

オーナーはそう言つと歩き出す。

「じゃあ俺達も適当にぶらぶらするか」

幸太郎がそう言つと各自歩き出す。

ユウキは今待合室に居た。ターミナルの汽笛が鳴ると同時に周りの景色が変わる。

それを見たユウキは、

「なんだこれ……、どうなってんだ？」

「凄いでしょ？」

そう言つてユウキの下に歩いて来たのはコハナだった。

「あんた確か、コハナだっけ？」

「ハナで良いよ？」

「そっか、じゃあハナ、このターミナルってのはどうなってんだ？」

ユウキの問いにハナは少し考え、

「さあ、私もよくわからないの。ただ言えるのは、ここは時間の中
つて事」

「時間の中か……。俺も幽霊列車に乗ってたけど時間の中を旅し
た事は無かったな……………」

ユウキは少し黙ると再び口を開く。

「なあ、ハナ。これから助けに行く奴等ってどんな奴等なんだ？」

「そうね…………、じゃあまずは良太郎から。野上良太郎、電王に変
身する男の子んだけど、凄く気が小さくて運が悪いんだけど、誰
よりも優しくて、誰よりも強い」

「なんかすげえ奴なんだな……………」

ハナはさらに続ける。

「次は良太郎に協力するイマジン。まず赤鬼のモモタロス、こいつ
はただの喧嘩馬鹿。亀のウラタロス、こいつは正に女の敵ね。熊の
キンタロス、いつも寝てばっかだけど頼りになる奴。龍のリユウタ
ロス、まだまだ子どもでしょっちゅうモモタロス怒らせてる」
「なんか、すげえ賑やかそうだな」

ユウキは良太郎達の話聞きなんだか懐かしそうな表情をした。

「あいつ等、どうしてるかな……………」

ユウキの言うあいつ等、それは恐らく渚達の事だろう。

「あいつ等？」

ハナがそう聞くとユウキはハッとして、

「あ、いや何でもない。それでゼロノスはどんな？」「桜井侑斗、わがままで自分勝手だけど自分の意志はしっかり持っているって感じ。そして侑斗に協力するイマジンのデネブ、本当に面倒見が良くて侑斗のお母さんって感じ。侑斗の事を誰よりも気にかけてる」
「そっかあ」

ユウキとハナがそんな話を話していると、

「おい、ユウキ！」

「ん？」

ユウキは声のする方に振り向く。
すると幸太郎がこちらに走ってきて、

「時の牢獄の場所がわかった！」

「まじか！」

今ユウキ達はターミナルのプラットホームに居た。

「なるほど、わかった」

ユウキはオーナーから時の牢獄の場所を聞いた。

するとテデイが、

「じゃあユウキ、幽霊列車を」

「ああ」

テデイがそう促すとユウキはライダーパスを取り出す。
するとどこからともなく幽霊列車が現れユウキ達の前で停車する。

「じゃあ幸太郎、テデイ、ハナ、行くか！時の牢獄に！」

ユウキがそう言うと幸太郎達は幽霊列車に乗り込む。

――幽霊列車内――

ユウキは幽霊列車を運転する為、変身の準備を完了させる。

「変身」

《スカルフォーム！》

ユウキは幽汽SFに変身すると運転席に行きマシンデスバードに跨がりライダーパスをセットする。

「飛ばすからしっかり捕まっとけよ！」

幽汽SFがそう言うと幽霊列車はゆっくり動き出し、時の牢獄へ向かって走り出した。

仮面ライダー 幽汽 時の牢獄 “前編” (後書き)

次で幽汽編は終了です。

仮面ライダー幽汽 時の牢獄“後編”（前書き）

漸く出来ました。
では、どうぞ！

仮面ライダー幽汽 時の牢獄“後編”

幽霊列車に乗り込み時の牢獄を目指す幸太郎達。

「あ、そう言えばオーナーが幽霊列車に乗る前にこんな事を……………」

突然テディが思い出した様にそう言う。

“それと、もう一人助っ人を呼んでありますから”

「誰だろう？」

幸太郎達はそんな事を言いながら幽霊列車の客室に入っていく。

客室に入った瞬間三人は啞然とした。

その理由は、

「遅いぞ、家臣達よ」

白い羽を撒き散らし幽霊列車の客室に優雅に座るジーク。

「助っ人ってこいつ！？」

幸太郎は呆れながらそう言った。

だがジークはそんな事を気にせずハナの下へ行き、

「姫、相変わらず美しい……………」

そう言ってハナの手を取りキスをしようとする。
だが、

「何であんたがここに居んのよ！ふんっ！」
「ぐぼっ！？」

ハナの鉄拳がジークの顔面にヒットする。

「はぁ……………」

デディはその様子を呆れながら見ていた。

その頃、時の牢獄では……………。

「だぁ〜！何なんだよここ！」
「ちよつと先輩静かにしててよ！」
「騒いでもしやあないやろ！」
「モモタロスのバーカバーカ！」
「お、落ち着いて！」

上からモモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、デネブの台詞。

今モモタロス達は特殊な檻で出来た牢屋に捕らえられていた。

「落ち着いてられるかよ！幸太郎、早く来てくれえ！」
「……………はぁ……………」

モモタロスは雄叫びを上げ、ウラタロス達は呆れていた。

その様子を別の牢獄に捕らえられている良太郎と侑斗は、

「モモタロス……………」

「野上、何とかなんねえのか……………」

ウラタロス達同様呆れていた。

良太郎は気を取り直して、

「幸太郎を待つしかないよ……………」

「確かに、今頼れるのはあいつしかいねえしな」

「うん、頼むよ幸太郎……………」

良太郎は静かにそう呟いた。

そしてその間もモモタロスは何かを叫んでいたが、良太郎と侑斗は遠い目をして聞き流したそうなの……………。

その頃幸太郎達は、

「にしても、まさか幽霊列車に乗るとは思ってもみなかったな……………」

……………」

「確かに……………」

「あの時は敵だったからね……………」

「中々良い乗り心地だ……………」

最後の一人の言葉は無視して、幸太郎達は幽霊列車事件の時の事を思い出していた。

まさか幽霊列車に乗る事等考えもしなかった。

無理もない、やり方を間違えたにしてもあの時は完全に敵だった死郎が所持している物なのだから。

「でも、先祖と子孫であんなに変わるもんか？」

「元からの性格なのか、それとも彼を変える様な出会いや出来事があつたのか……」

幸太郎とテディがユウキについて話しているなか、

「そんなの関係ないじゃない、過去がどうであろうと、何があつたとしても、ユウキはユウキよ」

唯一コハナだけがユウキの過去等全く気にしてなかった。

おそらくユウキが良太郎達の話聞いた時、どこか懐かしい表情を浮かべていたからだろう。

幸太郎達がそんな話を話していると、

「見えたぞ！あれが時の牢獄だ！」

列車の車内アウンスを通じて幽汽SFが幸太郎達にそう報告する。

それを聞いた幸太郎は窓から覗き込む。

すると時の砂漠の一部が黒く歪んでいた。

「一気に行くぜ！掴まってるよ！」

幽汽SFはそう言つと幽霊列車を時の牢獄へと走らせる。

その頃時の牢獄のある場所では、

「来たか……………」

デスイマジンはその呟くと、

「ふん！」

自身の肉体から砂を撒き散らし、大量のイマジンを造り出す。

「行け！」

デスのその言葉を合図にイマジン達は一斉に走り出す。
邪魔者を消す為に。

幽汽SFは幽霊列車を時の牢獄へと進入させ、時の牢獄へと降り立つ。

「ここが時の牢獄……………」

辿り着いた時の牢獄は暗い洞窟の様だった。
そして少し遅れて既にNEW電王・ストライクフォームに変身した
幸太郎とマチエーディとコハナとジークが幽霊列車から降りる。

「ここにじいちゃん達が……」

NEW電王SFがそう言った瞬間、彼等の前にデスの造り出した再生イマジン軍団が立ちはだかる。

幽汽SFとNEW電王SFはそれぞれ武器を構える。

「幸太郎、どうする？」

「こいつらを倒しつつじいちゃん達を探す！」

「了解！」

二人のライダーはそう言うのと敵軍へと突っ込む。

二人のライダーは圧倒的な強さで次々とイマジン達を蹴散らしていく。

コハナとジークはその後ろを着いていく。

その戦闘により起こる爆発の音はモモタロス達の居る牢獄まで聞こえていた。

「ん！？まさか幸太郎達か！？」

モモタロス達に希望が見え始めた。

そしてモモタロスは力一杯叫ぶ。

「こぉ～たるぉ～！」

その声は時の牢獄内に響きわたる。

「この声、モモタロスだ！」

「幸太郎、どっちだ！？」「たぶん、こっちだ！」

幽汽SFとNEW電王SFはモモタロスの声を頼りに牢獄内を進んでいく。

そして、

「ユウキ、こっちだ！」

NEW電王SFが良太郎達の捕らえられている牢獄への道を見付ける。

「幸太郎、行こう！」

幽汽SFとNEW電王SFはモモタロス達の救出を試みるが、イマジン軍団に阻まれ中々前に進めない。

「くっ！これじゃあ！」

幽汽SFが悪態をついているとNEW電王SFが、

「ユウキ！行ってくれ！」

そう言いながら【カウンタースラッシュ】を放つ。

「幸太郎！でも！」

「いいからっ！行けっ！」「……………わかった！」

幽汽SFはそう言つと走り出す。

そして通路の一番奥に辿り着くと、そこには二つの牢獄があり、一つは良太郎と侑斗が捕らえられており、もう一つにはモモタロス達イマジンが捕らえられていた。

幽汽SFは良太郎と侑斗の居る牢獄に近付き、

「あんたが野上良太郎か!？」

「えっ?う、うん………」

良太郎は幽汽SFの問いに戸惑いながらも返事をする。幽汽SFは次にモモタロス達イマジンが捕らえられている牢獄に近づく。

「あんたらが野上良太郎に協力するイマジンだな？」

幽汽SFはそう聞くとモモタロスは全く違う事を言い出した。

「てめえ!幽霊野郎!」

「はっ!？」

モモタロスのいきなりの言葉に幽汽SFは困惑するしかなかった。

「みんな気を付けろ!罠だ!」

「やばいじゃ〜ん!」

「ちよつと先輩!まだ敵かどうか分からないでしょ!？」

「本間や!とりあえず今はここから出る事や!」

「そうだ!落ち着くんだモモタロス!」

牢獄内でガヤガヤしているモモタロス達を見て幽汽SFはただただ見ているだけだった。

だがその時、

「後ろ!」

「えっ!？」

良太郎が叫び幽汽SFが振り返る。
だが時既に遅し。

突如として現れたレオイマジンの一撃が幽汽SFに直撃する。

「ふん！」

「があっ！」

幽汽SFは壁に叩き付けられる。

レオはそこから追撃しようとするが、幽汽SFは直ぐ様体勢を立て直し反撃する。激しい攻防が続く中、幽汽SFはそ中で一瞬の隙を見付けライダーパスをユウキベルトにセタッチする。

《ハイジャックフォーム！》

幽汽SFはハイジャックフォームにフォームチェンジすると、サヴェジガッシャー・ソードモードをネオソードモードに組み直し一気に反撃する。

圧倒的な強さでレオを幾度となく切り裂くと、再びパスをセタッチする。

《フルチャージ！》

フルチャージをした事でサヴェジガッシャー・ネオソードモードは巨大なエネルギーブレードを形勢する。

「喰らえっ！はあああ！」

サヴェジガッシャー・ネオソードモードを一気に振り下ろし【ターミネイトフラッシュ・ハイジャック】を発動する。

「ぐああああ！」

幽汽HFはレオを倒すと、牢獄を切り裂き良太郎達を救出する。

「ありがとう、助かったよ！」

良太郎は幽汽HFにそう言う。
だがその瞬間、

「うわあああ！」

「幸太郎!？」

NEW電王SFの叫び声が聞こえてきた。

「行こう！」

幽汽HFがそう言うのと全員は通路を駆け抜け広場に出る。

すると出たと同時にNEW電王SFがデスの一撃によってこちらに
吹っ飛んできて幸太郎とデイに戻ってしまう。

「幸太郎！」

「天井！」

良太郎達は幸太郎とデイに駆け寄る。

「大丈夫!？」

「じいちゃん……………」

「なら俺が！」

幽汽HFはそう言うのとデスに向かって走り出す。

だがデスは鎌による攻撃で幽汽HFを一切寄せ付けない。

「あの野郎、何で俺達を助けるんだ？」

モモタロスは疑問を抱いていた。

何故幽汽HFが敵の筈の自分達を助けるのかを。

それはコハナが説明する。

「モモ、彼は死郎なんかじゃないのよ」

「なに！？」

コハナの言葉に幸太郎、テディ、ジーク以外の全員が疑問の声を上げた。

「彼は死郎の子孫、ユウキ。死郎と違ってユウキは人々の為に戦ってるの」

「……………」

コハナがそう言った瞬間、幽汽HFがデスの一撃で大きく吹っ飛ばされてしまう。

「ぐああ！」

それを見た良太郎は、

「あ！モモタロス！」

そう言ってデンオウベルトを取り出す。
だが、

「ません！」

デスはそう言うと鎌を振るい良太郎達に攻撃する。

「っ！危ない！」

幽汽HFはそう言うと一気に駆け出し彼等の前に立ちデスの一撃を諸に受ける。

「ぐああああ！」

幽汽HFは変身が解けその場に倒れる。

「ユウキ！」

「お前……………」

幸太郎達はユウキに駆け寄る。

モモタロスは複雑な声を漏らす。
するとデスが、

「貴様等がどれだけ足掻こうと、この俺には勝てん」

デスはそう言う自身と自身の肉体から砂を撒き散らし再び再生イマジン軍団を造り出す。

そして更にこう続ける。

「それに貴様等、そいつはあの死郎の末裔だ。もしかすれば、貴様等を裏切るかもしれんぞ？」

デスの言葉に反論したのは、モモタロスだった。

「はっ！誰の事言ってた？」
「何？」

モモタロスがごくわずかな時間でユウキに対し導き出した答え、それは、

「こいつが誰の子孫だろうが関係ねえ！こいつはこいつだ、そうだろう？ユウキ」「モモタロス……………」

ユウキが立ち上がるとモモタロスは彼の胸を軽く叩く。
そして、

「ああ！」

ユウキは力強く返事をする。
そしてデスに向き合い、

「俺が誰の子孫だろうと関係ない！人からどう言われようが知ったこっちゃねえ！俺がする事はただ一つ、誰も悲しまない世界をつくることだ！」

それを聞いたデスはこう聞く。

「貴様、何者だ！」

そう聞かれたユウキはニヤリと笑い、

「使わせてもらうぜ、渚……………。通りすがりの仮面ライダーだ！地獄に行っても覚えてろ！」

ユウキはそう言うで一歩前に出る。

それに続き幸太郎、良太郎、侑斗も前に出る。
そして四人はそれぞれベルトを取り出す。

「じゃあ！良太郎、行くぜ！」

モモタロスはそう意気込むも良太郎は、

「待つてモモタロス。ここは、行くよジーク！」

「なにい！？」

横で驚愕するモモタロスを見無視して良太郎はウイングフォーム専用のデンオウベルトを取り出す。

そしてそれに続きユウキと幸太郎と侑斗も自身のベルトを取り出し
変身準備を完了させる。

そして、

「……変身……！！！！」

《スカルフォーム！》

《ストライクフォーム！》 《ウイングフォーム！》

《アルタイルフォーム！》

ユウキは幽汽SFに、幸太郎はNEW電王SFに、良太郎は仮面ライダー電王・ウイングフォームに、侑斗は仮面ライダーゼロス・アルタイルフォームに変身する。

「降臨、満を持して……」

「最初に言っておく、俺はかーなり、強い！」

電王WFとゼロノスAFが決め台詞を言うと同時に仮面ライダー達はそれぞれの武器を構え再生イマジン軍団に向かって走り出す。そして再生イマジン軍団もそれを迎え撃つべく走り出す。

「俺達も行くぜ！」

「「「「おう！！！！！」」」」

モモタロス達イマジンもそれに続き武器を構え走り出す。

ライダー達は自身の武器を巧みに扱い次々とイマジンを倒していく。

「さあ、どんどん行くぞ！」

幽汽SFはそう言うつとパスをセタッチする。

《ハイジャックフォーム！》

幽汽SFはハイジャックフォームにフォームチェンジすると、再びパスをセタッチする。

《フルチャージ！》

「でやあああ！」

幽汽HFは巨大なエネルギーブレードを形成し【ターミネイトフラッシュ・ハイジャック】を円を描く様に発動し周りのイマジンを一掃する。

そしてNEW電王SFもパスをセタッチして右足を赤く輝かせる。

《フルチャージ！》

そして一気に飛び上がり【ストライクスパート】を放ちイマジンを一掃する。

一気に蹴散らす。

「はあああ！」

電王WFはデンガツシャーをブーメランモードとハンドアックスモードに組み立て二刀流でイマジンを次々と切り裂く。

そしてデンガツシャー・ブーメランモードを敵に向かって放り投げ、その間にパスをセタツチする。

《フルチャージ！》

そしてデンガツシャー・ブーメランモードをキャッチして、

「我が刃の前にひれ伏せ！」

そう言つて二つの刃をイマジンに向かって放り投げ敵を切り裂く【ロイヤルスマッシュ】を発動する。

二つの刃は見事にイマジン軍団を一掃した。

ゼロノスAFはゼロガツシャーをボウガンモードに組み立て遠距離戦を展開する。そしてゼロノスベルトのボタンを押し、

《フルチャージ！》

フルチャージを行いカードをゼロガツシャー・ボウガンモードに装填してエネルギーをチャージする。

そしてイマジン軍団に目掛け【グランドストライク】を放つ。

「はあああ！」

ゼロノスの必殺の一撃はイマジン軍団を一掃した。

そして残ったデスに幽汽HFはサヴェジガッシャー・ネオソードモ
ードの剣先を向け、

「あとはお前だけだ！行くぞ！」

幽汽HFがそう言うのと四人のライダーはデスに向かって走り出す。
だが、

「小賢しい！」

デスはそう言うのと鎌を振るって強力な衝撃波を放ちライダー達を吹
き飛ばす。

「「「「うわあああ！！！！」」」」

だがライダー達はそれに怯む事なく再び立ち上がり駆け出す。

「しつこい奴等だ」

デスは呆れた様に呟くと再び鎌を振るいライダー達を吹き飛ばす。

「「「「ぐああああ！！！！」」」」

デスの圧倒的な強さに成す術の無いライダー達。

このまま負けるのか、幽汽HFがそう思った瞬間、

『こっとなつたら………！』

良太郎がそう言うのと電王WFは立ち上がり、

『みんな！一緒にやるよ！』

「漸く出番か！待ちくたびれたぜ！」

「じゃあ行きますか！」

「よっしゃ！やったるで！」

「てんこ盛り！」

良太郎がそう言うのと四人のイマジンは走り出し四人同時に電王W Fに憑依する。

そして電王はクライマックスフォームの背中にウイングフォームのデンカメンが追加された電王・超クライマックスフォームへと強化変身する。

「やっぱこれきもちわりいんだよね」

「狭いしね……………」

「くまちゃんもうちよつとそつちいてよ！」

「狭いからしゃあないやろ！」

「家臣共、苦しゅうない」『そんな事言っでないで、行くよ！』

モモタロス達は文句を垂れるが、良太郎の一言でデスに向き直る。

「デネブ、来い！」

ゼロノスA Fはそう言うとかードを裏返し再びベルトに装填する。

《ベガフォーム！》

ゼロノスA Fはデネブを憑依させたゼロノス・ベガフォームにフォームチェンジする。

「最初に言っておく、胸の顔は飾りだ！」

『馬鹿！んな事言ってる場合か！』

ゼロノスVＦのずれた台詞に侑斗が突っ込む。
そして、

「よし、俺も！」

幽汽HＦがそう言うのとベルトのバックルが赤く輝く。
そしてパスをセタッチする。

《タイラントフォーム！》

幽汽HＦは黒の部分を真紅の赤になり、銀の部分が黄金に輝き、デ
ンカメンも赤になった幽汽の最強形態・タイラントフォームへと強
化変身する。

「一気に決める！」

幽汽TFがそう言うのと、ライダー達は一斉に必殺技の体制に入る。

《《フルチャージ！！！！》》
《チャージアンドアップ！》

NEW電王SＦとゼロノスVＦは走り出し【カウンタースラッシュ】
と【スプレッデッドエンド】を放つ。

「はあああ！！！！」

「ぐおおお！！」

そして幽汽TFと電王SＣFは飛び上がり、右足と左足を突きだし

【タイラントデニライダーキック】と【超ボイスターズキック】を放つ。

「でやあああ……！！！！！」

「ぐああああ！」

四大ライダーの必殺技を受けたデスは耐えきれず遂に爆発した。

「よし！」

ライダー達は安堵の表情を見せる。
だがその時、

「ご苦労さん、ライダー共！」

「なんだ!？」

ライダー達は声の主を見る。

声の主は灰色のスーツを着た青年だった。

その青年はデスだった砂の中からあるモノを拾い上げる。

「これこれ」

青年はウキウキしながらそれを拾う。

「それは！」

青年が拾ったモノ、それは、

「電王のベルトだと!？」

青年はベルトを拾い上げるところ言う。

「お前等は俺に利用されてたんだよね」

「なに！？」

「俺はデスイマジンを利用してお前等ライダーを誘きだし、その力をデスイマジンにぶつけさす事でこいつの体からこれを造り出したってわけだ」

そう、何もかもこの青年の思惑通りだったのだ。

「んじゃま、俺はこの辺で」

青年はそう言うと言元の壁を出現させ、姿を消した。

「なっ！待て！」

幽汽TFは追い掛けるも青年は既に居なかった。

「一体、何が……」

ライダー達はただその場に立ち竦んだままだった。
そしてあの青年の目的とは一体……？

仮面ライダー幽汽 時の牢獄 “後編” (後書き)

次回からはディライド編！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3287y/>

仮面ライダー×仮面ライダー ディライド&幽汽 MOVIE大戦PAST

2011年12月19日23時50分発行